第十三篇　用　間

一

孫子は言う。およそ十万もの軍隊を動かし、敵国内へ千里も出向いて征伐することになれば、民衆の出費や朝廷の経費も一日に千金を費やすことになり、兵士となった人々は国内外をあわただしく往来することで路上に疲れて果て、それらの人々の土地まで耕作することで、自分の土地の農事を十分にできない者が七十万家も出てくる。そして、戦場では敵と我の両軍が数年間も対陣してから、一日の決戦で存亡死生を争うことになる。それにもかかわらず、官位・俸禄や財宝を惜しんで間者（＝スパイ）を用いず、敵情を知らなければ、軍は敗れ、国は滅亡し、人民が死ぬ。これこそ不仁（＝民衆への慈愛心に欠けること）の甚だしいものである。このような人は、多くの兵士を率いる大将にすべきではなく、君主を補佐すべき人にはなれず、およそ勝利をもたらすリーダーとは程遠い。

聡明な君主や賢い将軍が兵を動かせば必ず敵に勝ち、功を成就することでは衆人よりも優れているのは、「先に知る」ことを何よりも重視するからである。「先に知る」ということは、祈祷によって知るのではない。占いによって知るのではない。日月五星の運行を験して知

るのでもない。必ず「人」ということについて考えて、しかる後に敵情も明らかに知ることができるのである。

二

そこで、間者を用いるには、五つの方法がある。因間があり、内間があり、反間があり、死間があり、生間がある。この五種類の間者を同時に活動させながら、その存在やそれぞれの情報伝達・指令の系統を敵にも味方にも知られない、というのが「神紀（＝神妙にして秩序正しい用い方）」であり、人々を治める君主が最も重視すべきことである。

因間とは、敵国の住人に厚く賄賂を与え、敵国や敵軍の状態が虚であるか、実であるかを告げさせるものである。内間とは、敵の中枢にいる役人や君主の寵愛を受けている者など内部の事情に通じている者に財貨を十分に与えて、敵の謀を聴きだすものである。例えば、役人で恨みを抱いている者や、官職を失って閉居する者、時を得ずして下位にいる者、または才能があるのに任用されない者、詐によって貶められた者などを我の間者として用いるのである。反間とは、敵の間者が来たならば、これに厚く賄賂を与え、こちら側の間者にしてしまうことで、反対に敵を伺うものである。あるいは、敵の間者に嘘を告げてこれを真実と思い込ませ、敵の謀を失敗させることも反間という。

死間とは、誑事(きょうじ)（＝敵を偽りたぶらかす謀）を外にあらわして、我の間者にもこれを告げて知らせ、往って敵の間者にこれを伝えることで、真実と思い込ませるものである。敵がその言葉を信じて対応したならば、我の内々の謀は皆、これに合致しないことから、我の間者は詐を働いたとして終には殺されてしまうので、死間というのである。生間とは、自国と敵国を往来して知り得た事を報告するものである。

こうしたことから、君主や将軍は、全軍の中でも間者を最も親愛し、恩賞は間者に最も厚くし、仕事上の秘密は間者に最も厳しく守らせる。「聖智」でなければ間者を用いることができず、「仁義」でなければ間者を使うことができず、「微妙」でなければ間者から真実を得ることができない。「聖智」とは、さとくして物事の道理に通じており(聖)、智恵があってよくその是非正邪を知っている（智）ことである。これによって人の心をよく知っていなければ、間者を用いることはできない。「仁義」とは、相手を深く思いやり、親愛の情が厚く（仁）、疑うこと無く、よく決断する（義）ことである。間者が往来して敵の情報を我に告げ、敵国で謀をなすことについて、それらに疑念を抱き、判断に惑っていたのでは、間者を使うことはできない。「微妙」とは、幽微にして測り難く、精妙にしてよく物事をきわめることである。間

者の心底にも正邪があり、あるいは反間となって背き、我を偽ることもあるだろう。また、敵も間者を入れて我を疑わせ、我が心を惑わそうとする。このようなとき、大将の心が「微妙」でなければ、その真実をつかむことはできない。間者は秘密にして一切の痕跡を顕してはならないが、「先に知る」ため、どんなことにも間者は用いられる。未だ間者を敵国へ遣わしてもいないのに、その活動について聞き知った者があれば、間者とそのことを告げた者は、共に死罪にしてその口を封じるのである。

三

敵軍を襲撃しようと思い、城を攻め落とそうと思い、敵将を暗殺しようと思うのであれば、必ずそこを守る大将、それらの親近者、左右の大臣、謁見の取り次ぎ役、事を申し次げる役、守衛、宮中の警護や雑役に任ずる役人の姓名を尋ねて知り、我の間者に必ずそれらの身辺の探りを入れさせて、履歴・性癖・境遇などを知っておくようにさせる。こうして内通・内応の糸口を引出すのである。

敵国人で間者としてやって来て、我国の様子を伺っている者は必ず捜し出し、何らかの因縁を求めてこれと接触し、厚く賄賂を与え、わざと求める情報を与え、良い家宅に宿泊させる。このようにして、ようやく反間として用いることができるのである。この反間を通じて敵

国人に縁ができ、敵の役人に内通して、敵国の村里や中枢に間者となる人物を見つけ出して使うことができるのである。この反間を通じて我の間者の言を伝えることができるので、死間に偽りごとを言い含めて敵の間者に告げさせることができるのである。この反間によって敵の内部事情が分かるので、生間を敵国へ往来させ、何日の何時と定められた刻限どおりに帰来して報告させられるのである。五とおりの間者からの情報を君主は必ず知っておかねばならないが、それらの情報源の糸口は、必ず反間によって得られるものである。それゆえ、反間には最優先で厚遇しなければならない。

昔、殷の湯王が天下を取ったとき、伊摯(いし)という功臣が間者として夏の国に潜入しており、また周の武王が天下を取ろうとしたときには、呂牙(りょが)という功臣が間者として殷で活動していた。つまり、聡明な君主や賢い将軍は伊や呂のように智恵に優れた者を用いて敵国のことをよく料(はか)らせ、間者としてその実情を探らせて「先に知る」ので、必ず天下の功業をなしとげることができるのである。このように優れた間者を用いた情報活動こそが兵法の要(かなめ)であり、全軍もこれによって得られた情報を頼りにして行動するのである。